

真理の追求をしていけばいいと言ってばかりいずに、それも大切ですが、社会に貢献することも考えるべきではあるまいか。そしてこれまでの研究成果をどのように社会に役立てるか、足りないところはどこなのかを考える」必要があると述べられています。この対談では、このような視点から、言語障害、小言語問題、方言、アイデンティティ、老人語、差別と女性語、言語教育、表記、情報機器、情報選択、言語管理などの多岐にわたる諸問題が検討されています。ぜひ一読ください。

ところで、1930年代の古い話で恐縮ですが、社会心理学を専攻する者は、K. レヴィンという社会心理学の創始者のひとりに思いをはせるでしょう。彼は、理論と研究と社会的実践がうまくかみあえば、社会心理学は、人間についての科学的理解を推し進めるだけでなく、人間のウェルフェアもまた同時に推し進めることができると信じて、実践していました。彼から30年、1960年代の半ばには、社会心理学のなかで、科学と社会に対する二重の貢献という彼の価値がどのように継承されているかの反省が試みられています。²⁾ そのなかで総括されていることは、いまや主流の社会心理学者は、現実の人間や社会の諸問題に無関心で、科学的理論やモデルにばかり志向しており、K. レヴィンの価値を忠実に継承するような人道主義的で、実践への志向をもあわせもった社会心理学者は少数派となりつつあるということです。さらに、この反省が警告していることは、科学的理論志向、人道主義的実践志向のこのいずれにも与しないような、新しい価値の出現と流行です。その価値を一言でいえば、「楽しめればよい」「うければよい」です。その典型が、まず、読者・聴衆をアツといわせるデモンストレーション、プレゼンテーションをしなさい、その内容の理論的意義や社会的意義は、かりにそれが必要とされるにしてもその次です、という立場です。この反省が行われてから40年、科学という営みを長い目で見れば、この第3の価値がそれだけで存えることはないと思いたいところです。しかし、科学に対する貢献だけではなく、社会に対する貢献も同時に必要と考えるような、K. レヴィンの価値についてはどうなっているのか、もういちど反省が必要かもしれません。

「ウェルフェア・リングイステイクス」に基底する価値は、それほど新しいものではないし、リングイステイクスに限定されたものではないかもしれません。その価値の述べ方や具体的な表れは、それぞれの研究者の数だけあってよいものだろうと思います。そうしたものの蓄積が総体として「ウェルフェア・リングイステイクス」をかたちづくっていくのだろうと思います。

¹⁾徳川宗賢・J. V. ネウストプニー 1999 ウェルフェア・リングイステイクスの出発. 社会言語科学, 2(1), 89-100.

²⁾Ring, K. 1967 Experimental social psychology: Some sober questions about some frivolous values. Journal of Experimental Social Psychology, 3, 113-123.

は、ろう者を取り巻く環境を知らない人には罪はない。しかし、ろう者の言語環境や日頃のコミュニケーションを少しでも知っていれば、お互い気分を害することなくやり取りができたのではないかと思う。

このようなコミュニケーション上の齟齬はどうすれば薄まっていくのだろう。私は通訳をする傍ら、大学院や研究所に在籍するなどして言語学やコミュニケーション研究を進めていた。非力ながら、私の経験をもとに手話をコミュニケーション研究の対象として捉えることはできないだろうかと考え始めた。それまで手話研究といえば、文法や語彙論についての言語学な研究や、ろう者の生活やろう者のアイデンティティについての社会的な研究が中心だった。それに対し、手話がコミュニケーション上でどのように用いられているかというプラグマティックな観察はそれほど多くなかった。そこで私は果敢にも、手話とジェスチャーの共通点はどこにあるのかという視点で研究を始めることにした。なぜこのアプローチが「果敢」なのかというと、手話はこれまで「身振り語」などと呼ばれ、言語として独立した体系を持ったものではないとみなされていた。これまでの手話研究者は、いかに手話表現が身振りとは一線を画すものか、また手話とはどのような言語かを記述することを試みてきた。ジェスチャーとの共通性を観察するのは、その研究の歴史に歯向かうような行為である。しかしながら、冒頭に挙げた「川」の流れに関する手話表現を見れば分かるように、手話もジェスチャーも身体というモダリティを用いている点で共通している。現在は、ジェスチャー研究で開発されてきたジェスチャーの記法を用いて、日常的な手話会話を詳細に書き起こし、手話会話分析を進めている。

手話のコミュニケーション研究はまだ始まったばかりである。私の研究手法が、三本指の「川」をダイナミックに上下に動かすほどの荒い流れにもみくちゃにされてしまうものなのか、いくつもの静かで豊かな「川」が混じり合って「大海」に出ていけるものなのか、まださっぱり見当がつかない。手話には、社会言語科学研究が焦点を当てるべき多くの現象が残されている。みなさんを巻き込んで、いつか大きな海にたどりつきたいものである。

■□ [03] 第 24 回大会のお知らせ ■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

社会言語科学会の第 24 回大会は、以下の予定で行われます。
皆様のご来場をお待ちしています。

【日時】2009年9月19日（土）20日（日）

【場所】京都大学 吉田南キャンパス (<http://www.h.kyoto-u.ac.jp/access/>)

〒606-8501 京都府京都市左京区吉田二本松町

【交通】地下鉄烏丸線 今出川駅（市バス：烏丸今出川駅）／地下鉄東西線 東山駅（市バス：東山三条駅）／阪急線 河原町駅（市バス：四条河原町駅）から市バスで 15～25 分（201 系統：京大正門前下車）。

その他の行き方は、<http://www.h.kyoto-u.ac.jp/access/>の情報を参照。

◆招待講演

9月19日(土) 16:00 - 17:30

- ・移民政策研究の意義と課題

近藤 敦(名城大学)

◆ワークショップ

9月19日(土) 10:00 - 12:00 (2並列開催)

- ・地域に定住する日本語学習者の言語生活に関する縦断的研究

—OPIテストを活用した会話データからみえてきたこと—

野山 広(国立国語研究所) 企画者

嶋田 和子(イーストウエスト日本語学校)

岡部 真理子(国立国語研究所)

簗野 智紀(国立国語研究所)

塚原 佑紀(首都大学東京大学院)

- ・空間表現はいかにして構成されるのか

—個人内要因と参与者間の相互作用—

城 綾実(滋賀県立大学大学院) 企画者

古山 宣洋(国立情報学研究所) 企画者

片岡 邦好(愛知大学)

武長 龍樹(東京大学大学院)

松本 曜(神戸大学大学院)

森 直久(札幌学院大学)

9月20日(日) 13:30 - 15:30

- ・持続可能な社会の実現に向けて私たちのできること

—ウエルフェア・リングイスティックスを目指して—

村田 和代(龍谷大学) 企画者

大塚 裕子(財団法人計量計画研究所)

オストハイダ, テーヤ(関西学院大学)

坊農 真弓(国立情報学研究所)

森本 郁代(関西学院大学)

渡辺 義和(南山大学)

◆口頭発表

9月19日(土) 11:30 - 15:00

9月20日(日) 10:00 - 16:05

◆ポスター発表

9月19日(土) 13:35 - 15:55

※プログラムの詳細は、大会委員会のホームページをご覧ください。

<http://www.wdc-jp.com/jass/24/>

■□ [04] 2009年冬季講習会について ■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□■□

「データ解析環境 R」の講習会を12月に予定しております。募集開始は9月中旬の予定です。ふるってご参加ください。

データ解析環境 R 入門：ダウンロードから分散分析・重回帰分析まで

【目的】

データ解析環境 R は、言語学、心理学、精神医学などの社会科学のデータ解析に必要な機能を備えている「無料の」ソフトウェアあることから、教育上、非常に重要なツールと考えられる。本講習会では、心理統計学や生物統計学を専門としていないが、データ解析を行う必要がある者に向けて、1日の講義及び実技指導を行う。この講習会により、データ解析環境 R を利用して、主要な解析手法を使えることができるようになることを主眼とする。

【日時】2009年12月19日(土) 10:00 - 17:00

【場所】日本大学文理学部 図書館2階 メディア・ラボ4

http://www.chs.nihon-u.ac.jp/index-con/access_f.html

【講師・助手】

奥村 泰之、相澤 裕紀、伊藤 慎也

【応募資格】

統計学の基礎知識があること

何らかの統計ソフトウェアの使用経験があること

【学習範囲】

Rのインストール／相関係数／t検定／カイ二乗検定／分散分析／重回帰分析

【定員】

40名(定員を超えた場合は先着順)

